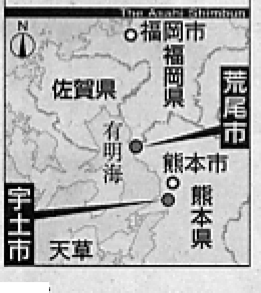
再生アイデア商店街

産直店 高齢者「待ってた」

空き店舗を利用した産直所。野菜、米や焼き物も並ぶ=熊本県荒尾市増永で



荒尾

お年寄りが集う通りは荒尾市にある。商圏が半径約300㍍の中央商店街。戻りつつあるにぎわいの中心にあるのが、空き店舗で昨年5月に生まれた農産物直売所だ。

午前9時の開店から農家が白菜やミカンなどを運んで並べる。つえをつき、自転車を押し、お年寄りがやって来る。「危なかけん、遠くまで行けん。運動になるし、便利よかですよ」。生花を買った小川弘子さん(82)は笑顔で話した。

荒尾市は三池炭鉱万田坑で栄え、約20年前は約6万3千人が暮らした。97年の閉山後に急減した人口は約5万7千人。約1㌔東にできたショッピングセンターの影響もあり、30店が軒を連ねた商店街は十数店になった。

市は04年、総務省の地域再生マネジャー事業に目をつけた。町づくりのノウハウを持つ企業や個人を招き、地域振興を支えてもらう制度。同年暮れに斉藤俊幸さん(51)が着任した。大学でも教えるコンサルタントで、神奈川県横須賀市の商店街を自家製ワイン造りなどで活気づけた実績がある。

斉藤さんは昨年5月、市と商店街が地域おこしの拠点にと空き店舗に構えた「青空研究室」に常駐を始めた。「野菜を買う場所がない」という嘆きを聞き、「家賃の足しに」と直売を始めた。初めは月100万円弱だった売り上げは倍増し、2月から黒字続きだ。

現金収入を得たい農家、近くで買い物をしたいお年寄り、にぎわいを取り戻したい商店街。3者のニーズが合致した。斉藤さんは「小さな生活圏に高齢者のマーケットがあることに気づいた」と話す。直売店は農家に売り上げの15%を納めてもらう。ワインやジュース、味付けノリなど独自商品も開発した。

効果は波及した。市南部の米倉庫跡で3月、魚介類の直売所が誕生。JR荒尾駅前では今月11日、商店主らが直売所「にんじん畑」を開いた。市はお年寄りに優しい直売所を5、6店に増やしたい考えだ。

斉藤さんは来年3月で任期を終える。「小さな直売所が集まれば、大型店に負けない可能性がある」と期待している。